

---

# 狼の赤い寄り道

餛飩粉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狼の赤い寄り道

### 【Nコード】

N8530Z

### 【作者名】

餛飩粉

### 【あらすじ】

群れからはぐれた狼が、やがて辿り着いた森の中で赤い頭巾を被った少女に出会う。狼の中で湧き上がる感情とは一体何なのか。少女から受け取った赤い実は何なのか。一人と一匹はどうなるのか。

童話の赤ずきんから着想を得た完全オリジナルの短編小説です。

非常に短い作品ですが連載と言う形を取らせていただきますが、本当にあつという間の作品ですので暇なときにパパートと読んでいただければ幸いです。

## 一匹の狼

一匹の狼が平原を宛もなくさまよっている。灰色の毛並みを持つ、大きいとはいえない体躯の狼。

狼は、配偶者を見つけられるために群れを出て行ったわけではない。目覚めたら群れからはぐれていて、ただっ広い平原に一匹で横たわっていたのだ。

平原は、群れで暮らしていたときより一層大きく感じた。群れの仲間や家族を探そうとしたが、自分の鼻が感じ取るにおいの判別に自信がなかった。

狼はまだ生まれてから二年ほどしか経っていないため、見た目こそ成熟しているが、狩りをした経験もない。

暗くなり始めた空に向かって、生まれたときから覚えている遠吠えを何度も繰り返したが、返事は来なかった。時間だけが過ぎていき、やがて狼は眠りに落ちた。雑草の枕は、母親の腹とは違って冷たかった。毛並みの様に生えているのに、そこには体温がない。

次の日は、銃声の音で目が覚めた。飛び退くように身を起こして首を左右に振ると、少し遠くの方に鹿が一頭、それも全速力で走っている。

そのすぐ後ろに、人間がいた。狩猟者だ。今しがた発砲した銃に弾を装填している最中だった。狼の存在には、まだ気づいていないようだった。狼は慎重な足取りで人間から距離を取っていき、一瞬で踵を返した。体力のことも考えず、四本の足を全力で動かす。そうして走っているうちに狩猟者に対する恐怖は消え、気分も晴れやかになってきた。心なしか空に浮かぶ太陽が祝福しているようだった。群れで暮らしていたときは、こんな爽快な気分を味わったことなどなかった。

狼は知らず知らずのうちに、走ることの喜びを覚えた。地面を叩く四本の足、風を受けて横一線になる体毛、己の内側から疾走を鼓舞するかのように脈打つ心臓。全身が一つの塊になって、駆けてゆく。何処までも、何処までも。

そんな喜びの最中、狼は無意識のうちに獲物を探していた。首を動かし、過ぎ去っていく風景の中に腹を満たす餌を求めながら、走っていた。そして、両目が遠くで草を食べている鹿を捉えた瞬間、自然と動きを止め、姿勢を低くして身構えた。

見覚えのある鹿だ。先ほど狩人に追われ逃げ回っていたあの鹿は、群れからはぐれたのだろうか一匹で草を口に含んでいた。それほど大きくはないが、あの一匹で一週間以上は何も食べずに済む量だ。

狼にとって、初めて狩りだ。それも群れで行うものではなく、孤獨な狩りである。同時に、孤獨な鹿を見るのも初めてだった。

まずは餌を食べている鹿に気づかれないように、ゆっくりと前進する。死角である真後ろに来るまでに、そう時間はかからなかった。周囲は平で身を隠すものはなく、距離は貪るほどある。

今気づかれたら確実に逃してしまつてであろう、絶妙にもどかしい道のりを、狼は貪るのではなく少しずつ咀嚼していった。草食動物が草や葉を口の中で時間をかけて磨り潰すように、ゆっくりと歩を刻む。

近づいていくうちに、狼はその鹿の異変に気がついた。鹿から血の臭いが漂っている。よく見ると獲物の左後ろ足に血の痕 いや、今も血が流れている。

狼は狩りの成功を確信した。それは油断だった。急ごうとする前足の爪が、小石と擦れて音を立ててしまった。

鹿の耳はそれを聞き逃さなかった。すぐさま食事を中断し、辺りを見渡した。振り返ったわけではないのに、真後ろにいたはずの狼の存在を捉えるや否やあつという間にその場から駆け出した。

遅れて、狼も後を追った。獲物に飢えた両目を頼りに、しつこく鹿の背後に食らいつく。

鹿は平原を右へ左へと走り、狼を撒こうとする。だが、足の傷のせいか、あまり速度が出ていない。狼は標的へと迫っていることを感じながらも、その足を緩めようとはしなかった。

そして、飛び掛った。涎を撒き散らしながら顎を大きく開き、鹿の背に噛り付く。牙が肉に食い込み、久しぶりの血の味が舌に広がった。

鹿がバランスを崩して転倒する。狼もつられる様に地面に叩きつけられ、口が離れてしまったが、すぐに立ち上がった。鹿が起き上がる前に首筋を噛み、皮ごと肉を食い千切る。血が勢いよく噴き出し、後は小便の様に垂れた。鹿はもう動かない。狼は首筋から身体の方へと口を進めた。

腹が一杯になる頃には、鹿の原型は頭と足の先ぐらいしか残らなかった。

狼は満腹感と初めての狩りの成功に興奮していたが、その喜びを分かち合う仲間は何処にもいない。寂しさを紛らわすかの様に狼は吠えた。自分がいた群れでなくてもいい。狼は他の狼に、仲間会いたかった。

しかし、反応はない。こんな時、どうすればいいのかわからなくて、狼はまた歩き出した。

しばらくして昨日と同じように、冷えた雑草にその身を委ねた。

## 頭巾の少女

放浪は何日も続いた。狼は最初の狩り以来、失敗を重ねていた。怪我をしていない獲物達は想像以上に足が速く、持久力も兼ね備えていた。

そろそろ空腹に身体が音を上げようかというとき、別の狼の群れに出会った。しかし、その群れは狼を受け入れてはくれなかった。配偶者を探すには若過ぎたし、群れは群れ以外の狼を好まない。いわば狩りの競争相手のようなものだからだ。

一度、狩猟者にも遭遇した。群れで暮らしていた時も何度か襲われることはあったが、狼には共に逃げる仲間も家族もない。鹿のように平原を大きく蛇行し弾をかわし続けていくしかなかった。狼自身、それを情けないと感じていが、狩猟者相手ではそうする以外に生き残る術がない。

恐怖と冷たさで浅い眠りを繰り返すばかりの日々に足取りは重くなり、獲物を見つけてもそのまま無視してしまうことさえあった。ふと狩りに挑戦しても、近づく前に逃げられてしまうこともあった。それでも、狼は生き延びようとした。

空腹を堪えながら、地平線を目指した。

群れの仲間に会いたかった。

家族に会いたかった。

もう一度あのおいを嗅ぎたかった。

あの温もりに顔をうずめたかった。

体力が限界に達する直前、平原の最果てに辿りついた。

狼の前に、鬱蒼と木々や草花が生い茂る森林が広がる。狼は思わず後ずさりして、その森林を眺めた。平原にも時折木が伸びていたりするところもあったが、目の前の森は足の踏み場もないほどにそれが密集している。身の丈と同じくらいまで伸びている草花が、地

面を覆っていた。

しかし、狼が感じたのは恐怖ではなかった。

自信はなかったが、森の奥からどこか懐かしいにおいを嗅ぎ取ったからだ。

本能が、何かの気配を感じていた。

目を凝らすと、ずっと先に奇妙な木が一本生えているのが見えた。平原では見たことのない木であったのもそうだが、どうやらその周囲だけ平たい地面になっているようだ。しかし一番狼の興味を引いたのは、幾つかの木の枝から、丸い物体がぶら下がっていることだった。見るからに瑞々しいそれは丁度口にくわえられそうで、獲物同様、不思議な魅力で狼の食欲を掻き立てた。狼には、それがどくどくと滴る血が凝縮したもののように見えた。

狼は草木を分けて、森の中へと入った。なんとか木の前まで辿り着くも、その物体は飛び上がったも寸でのところでは届かない位置にぶら下がっていた。魅力を振りまくだけ振りまいて、決して触れさせない。他の獲物と同じく、赤い物体は狼を見下ろしていた。

何度も跳躍しているうちに、木の根に足を取られてた。転倒した狼は自分のしていることの愚かしさに気づいているのかいないのか、それでも跳び続けた。

どこか、懐かしいのだ。それが何であるのか、決めようにも狼は自信がない。そんな曖昧な希望が、どうしてか狼を動かすのだ。

しばらくして、草の擦れる音がした。狼のものではない。こちらに近づいてくると悟った時、狼は音のする方と反対方向の草木の陰に身を隠した。

息を潜めて様子を窺っていると、向こうから人間の少女が少女が現れた。年は十歳前後、フリルのついたブラウスに、白い前掛けを下ろした茶色のスカート。そして何よりも特徴的なのが、少女の頭をすっぽりと覆っている赤い頭巾だった。まだあどけない頭巾の少女は、手に身の丈以上の長い棒を持ち、木製の編みこまれた籠を肘に掛けていた。

少女は、木の根を兎のように飛び越えて物体をぶら下げる木の前までやってきた。籠を根元に置こうと身を屈めた少女の頭部は、狼の位置からは頭巾しか見えなくなる。枝に実っている物体にそっくりだと、狼は感じた。

少女は長い棒を両手に持ち替え、赤い物体に向けて伸ばした。バランズを取りながら、少女はもう棒の先端で物体を突き揺らす。叩く度にゆらゆら揺れて、棒を当てていくほどそれは大きくなった。そして、一回転しようかというところで物体が枝から離れた。重力に従って落下したそれを、少女は拾い上げて籠に入れる。それを何度か繰り返し、小さな籠が一杯になるまで彼女は採り続けた。

一杯になった籠を見ると、少女は満足そうにその場を去ろうと元来た茂みの中へ入っていった。

同時に、狼もまた動いた。足元にあつた枝を踏みつけて、わざと大きな音を立てる。

少女がはつとなつて振り向く。視線が交差し、森の隙間を縫った風が、狼の毛並を、少女の茶色い前髪を揺らした。

しばらく、葉の擦れ合う音だけが響いた。

狼は、途端にどうするべきか迷った。今はとてつもなく空腹で、目の前にいる少女は肉だ。少女の持つ赤い物体は何だ？ 食べるのか？ 満たされるのか？ どちらにしる食べてみたい。

赤い頭巾の少女は狼を見て驚いたようだったが、逃げようとはしなかった。むしろ、茂みの中から顔だけを出した狼に近づいていく。狼は狼狽したが、心臓が激しく脈を打つのに対して身体はぴくりとも動いてくれない。今自分を支配しているのは、少なくとも恐怖ではないはずなのに。

得体の知れない、全身が総毛立つような何かが狼に自由を与えてはくれなかった。少なくとも、少女がいなければこんなことにはならなかっただろう。

少女はしゃがんで、狼と目線の位置を合わせた。そして籠に積まれた物体を一つ取り出すとそれを狼の前に置いた。そして、につこ



りと微笑んだ。

狼にはそれが何を意味しているのか理解できなかった。息を荒くしながら、目の前に置かれた物体と少女の笑顔を交互に見やる。

伸ばした舌から涎が垂れ落ちた。次の瞬間には、何のためらいもなくそれに齧りついた。肉よりも硬い食感で、血よりもずつと甘い汁が口の中に広がった。中には一際硬い部分もあって、食べられそうにない箇所もあったが、その部分を残してあつという間に平らげてしまった。

少女は狼の食事を見届けると、今度こそ森の中へと消えていった。狼はそれを追いかけなかった。追いかけてようとしたのだが、また身体が奇妙な感覚に支配されたのだ。これは懐かしさか、真新しさか、それとも別の何かなのか。

狼は自らの内に芽生えた何かの正体がわからなかった。

唯一、口の中の後味だけがはつきりと残っていた。

## 疾走

その日の夜が来ると、狼は今までとは違う理由で寝付けなかった。森にいるからではない。あの少女と出会ってから、狼は彼女のことですら頭が一杯になっていっている。頭の中から離れない少女の面影に、息が詰まる。どう対処していいのかわからず、狼は森の中を走り出した。

不思議と、木の根や草花に足を取られることはなかった。掻い潜るように森の中を進んでいく。呼吸はますます荒くなったが、爽快な風を受けると気が楽になる。そして、自分の中の感情に支配されるのではなく、身を任せることができるようになった。内側から来る燃え上がるような何かに、今までずっと抵抗していただけなのだと気づいた。

森を駆ける狼には今、宛があった。

赤い頭巾の少女だ。

彼女にもう一度会いたい。

少女のにおいははつきりと覚えている。

これだけは自信がある。

狼は今、そのにおいを頼りにひたすら走っている。

右往左往するのではなく、においのなる方へ、右へ、左へ。

会って何をしようというのか、狼はそこまで考えが行き渡っていない。

ただ、再び会うことが出来ればいいのだ。

出会って、この内側から湧く得体の知れない何かの正体を知りたい。

しかし、一体どうやって？

狼は、少し減速しながら考えた。考えたことなど、これまでにあっただろうか。

少女に、何をどうやって伝えればいいのか。どうすれば伝わ

るだろう。

段々と足の回転が弱まってゆく。自分でも気づかぬうちに、平原を放浪していたときのような足取りに戻っていた。あの宛のなかった頃に、つい昨日までのことだったのに、随分と遠い日の出来事だったかのようだ。

少女はまるで狼の考えを察したかのように、彼女が採った物体を分け与えてくれた。しかし狼は、まるで少女のことが理解できていない。

狼の頭の中に渦が生まれた。振り回されるかのように、足元が覚束なくなる。木の根につまづき、何度も転びそうになった。

狼は迷っていた。本当に少女に会うべきだろうか。会いたい。だが、会ってどうするべきか。そもそも会ってもいいのだろうか。

今までほとんど本能のみで生きてきた狼に、未知の事態が襲い掛かってきていた。先ほどから、自分の内側からここぞとばかりに溢れてくる何か。正体不明の何かに苦しめられているような感覚に、狼は眩暈を覚えた。死ぬ危険はないのに、同じくらいに恐ろしい。

だが、立ち止まりはしなかった。

今までと決定的に違うのは、不思議と孤独を感じないことだった。狼を今もなお引き寄せているにおいは、紛れもなく赤い頭巾の少女のものだ。

ふと、視界の隅にあの物体がぶら下がっている木が見えた。しかし、もう一つしかない。

狼は、他のものは全てあの少女が取ったのではないかと直感した。確かに、その物体だけが先ほどの木に実っていたものよりずっと高い位置にあった。少女が棒を伸ばして叩き落すには難しい高さだ。幸いなことに、物体を繋ぎとめている枝は少女の努力の甲斐あってか半分折れかかっている。

狼は何歩か下がって、助走のための距離を取った。

瞳を物体ではなく木の幹に向けて、狼は走り出した。全速力で距離を貪り、木に向かって飛び掛る。

獲物とは違い逃げも隠れもしない木の幹にぶつかる寸前で、狼は体勢を入れ替え、後ろ足で幹を蹴った。先ほどとは間逆の方向へ、一際高く跳躍する。そして、物体のぶら下がる枝目がけて口を伸ばした。

顎が捕らえたのは、同じ枝から生えていた一枚の葉だったが、木の枝は狼の体重でしなり物体は枝ごと宙に舞った。

狼は先に着地し、再び跳んだ。空中で物体を今度こそ捕まえ、そのまま一思いに噛み砕いた。

じわりと広がる味。

舌で味わいながら、ふと思った。

美味しい。

着地とほぼ同時に、狼は疾走を再開した。

疾走、そして……

狼は、自分の内側にある何かが気にならなくなっていた。走っているうちにその正体を知ろうとすることは無駄なことだとわかった。内側にある何かは、初めからそこにあっただのだ。狼が知るよりまずと前から、存在して、ただそれに気づいていなかったただだ。どこまでも続く樹海を、狼は迷いなく突き進む。赤い頭巾の少女のにおいのする方へ。

近づいている実感があつた。疲れてはいるが、全身に浴びる風が心地よい。

もう狼は迷わない。  
吠える。

リズムを刻む四つの足に、自覚なき変化が訪れた。  
前足が段々と浮いていき、宙を掻き始める。

後ろ足だけで地面を叩く。膝の関節の向きが変わる。大きな音を立てたにも拘らず、狼は意にも留めない。

目線の位置が高くなる。風に靡く体毛が、向かい風にも負けず頭部へと集まってゆく。

もう一度、吠える。  
「に！ に、に」

今までとは違う雄叫びが、森の中を木霊する。  
四本足の指の数が増える。爪は平たく、指に吸い付くように密着した。

肉球が内側に吸い込まれ、毛のなくなった指先に渦のような指紋を描く。

前足の指が伸びていき、手の形へと変わった。  
尻尾は縮み、そのまま消えてしまった。

牙は衰えたのか、平たい奥歯が口の中に生えた。

瞳は白と黒に、顔も平べったくなり、口と鼻もそれに引き寄せら

れた。

視界に、色がつき始めた。狼はそれを不思議だとは思わなかった。森は、深い緑色をしていた。花はそれぞれ赤や黄色、桃色と違う色をしていた。

三度、吠える。

「に、にんげん！ にんげんに」

そのとき、太い木の根が足首に引っかかった。前方へ派手に転がり、何度か前転した後、樹木にぶつかって止まった。

「……………」

狼 狼であったはずの存在は、自分の両手を見た。紛れもない人間の手だった。綺麗な肌色をしている。視線を身体の下へと向けていくと、人間の素足が二本、自分の身体から生えていた。尻尾はなくなっていて、股間の器官も形が微妙に変わっていた。

「あ、あ」

身に起こった事態に、思わず声が出た。そしてそのことにまた驚かされる。とても自分の喉から出ているとは思えないほど、聞き覚えのない声音だった。

全身が震えてきたが、それが恐怖でないことだけはわかる。

変貌を遂げた狼 十歳半ほどの少年は、歓喜を堪えきれずに吠えた。誰にでもなく、自分に向けた遠吠えだった。

森の中を駆け抜けているうちに、夜が訪れた。ふと彼が足を止めて上を見ると、葉の間から覗く空が暗くなっていた。紺色の中に、輝く幾つもの点が見えた。

もう夜になっていたのか。

そう思うと、どっと疲れが押し寄せてきた。膝を折って、木の根を枕に仰向けに倒れる。激しい呼吸で、お腹の辺りが上下する。体中を汗が伝う。それがやけに気持ち悪い。

だが、森を流れる涼しい風を受けているうちにその汗も引いていった。快い気分になり、瞼は重くなっていた。

少年は、久しぶりの深い眠りの中に落ちていった。

## 再会

目を覚ますと、木の葉の合間から見えていた空の色が夜とは変わっていた。この色が朝なのだということは理解していた。

同時に、彼はある異変に気がついた。素早く身を起こして辺りに気を配る。

昨日まであったものが、なくなっている。

「においが……」

少女のにおいが、しない。

嗅覚が衰えたわけではなかった。木のおい、草のおい、土のおいをはっきりとわかる。少女のおいだけが、まるで昨日に取り残されてしまったかのようにすっぱり抜け落ちているのだ。鼻に神経を集中させても、手応えはない。

額から汗が零れ落ちる。昨日の汗とは、量も気味悪さも違う。内側にある何かが崩れてしまいそうだった。人間はこの程度の汗に、こんなにも揺さぶられてしまうのか。少年は立ち上がることさえ叶わなかった。

風に吹かれた森のざわめきが、一層不安を煽る。何処から運んできた不安を、彼の内側へ積もらせていく。その重さに負けそうになったところに、物音が聞こえてきた。前方から聞こえてくる木の葉を踏む音は、徐々に近づいてきている。

「わっ！」

「えっ!？」

音の主が木の陰から突然現れると、彼は声を上げて驚いた。現れたのは少女だった。彼の声に彼女も小さく悲鳴を上げ、

「……………」

一転、顔を赤くして二人とも息を呑んで押し黙った。

とりあえず彼は立ち上がった。少女と出会えたのはよかったが、



少年はいざそうなると何をすればいいのかわからなくなった。何も言葉が浮かんでこない。折角喋れるようになったのはいいが、これではどうしようもない。

少女は昨日と同じ頭巾、同じ服を身にまとっていた。ブラウスと前掛けは雲のように白く、スカートは地面と同じ茶色だった。そして、大きな頭巾と籠の中の木の実、共に綺麗な赤色をしていた。

そして、同じ いや彼以上に驚きのこもった表情をして、裸の少年を見ていた。背丈は少年の方が頭半分ほど高い。

「あなたは……」

少女が呟く。咄嗟に少年は何か答えなければと思い、自分の胸を強く叩いた。

「お、おれ、にんげん！ き、きみと、いつしょ！」

少年はちゃんと言えた気がして、少女に伝わった気がして、嬉しくなった。鼓動が強まる。心臓も、内側にある何かも激しく動いていた。

……当の少女の方と言うと、曖昧に頷くだけなのだが。

「これは、なに？ これっ」

少年は構わず一歩踏み出して、また自分の胸を叩いた。

「きみにも、あるの？」

少女はしかし、首を傾げた。これと言われても少年が胸のことを言っているのか、手のことを言っているのか、それとも別の何かなのか区別がつかない。

「……………どれ？」

「これだよ！」

意味を測りかねた少女の手首を掴むと、少年は自分の胸に彼女の手を無理矢理押し当てた。

何故かはわからないが、胸の鼓動は一層激しくなった。少女にも、その震動が伝わってくる。視線が交差し、少年は急に少女に見つめられているのが急に恥ずかしくなった。

それは少女にとっても同じことだったらしく、彼女は少し顔を赤

らめて視線を下へと移した。必然的に、少年の下半身に目が行く。彼女の頬が、夕焼けに染まった。まだ日は沈んでいないというのに、不思議に思った少年も、自分の下半身へと目を向けた。股間からそそり立っているモノを見ていたら、天啓のようにある言葉が頭に浮かんだ。彼はこんな状態のことを知っていたし、何より言葉が浮かんできたことが嬉しかった。

「これ、興奮！」

「……………」

親切心で教えたつもりだったが、少女の顔は逆に引きつった。彼自身も、何故自分が興奮しているのかわかっていない。とりあえず、この興奮は彼女のおかげだった。獲物を前にしたときなどにこれに近い感覚が訪れるのだが、それとは少し違う気もするし、同じような気もする。

少年が考えている間に、彼女はそつと少年の胸から手を離れた。胸に触れていた温もりが、すつと冷めてゆく。

「と、とにかく、人間なら服を着てくれない？」

少女は目を宙に向けながら言った。先ほどの少年と同じくらい言葉がつかえている。

「ふく？」

「そつ、服。裸で外を歩くのは人間じゃないわ」

少女は自分のスカートと裾をつまんでみせた。だが少年は、  
「じゃあ、おれって、何？」

と真顔で聞くので、少女は返答に困った。

少し考えてから、少女はぽんと手を叩いた。

「と、とにかく、私の家に服があるから。それを着て。ね？」

「う、うん」

じゃあついてきて、と彼女が言うので、少年は大人しくその後が続いた。

後姿の少女の後頭部は頭巾にすっぽりと隠れていた。赤い頭巾は彼女の頭を包み込むように丸まっていて、籠の中の木の実とそつく

りだった。

前を歩く少女に気づかれないほどの小さな音が、腹から鳴った。

## 少女の家

少女に連れられ森の奥へと進んでいくと、不自然に開けた場所に出た。平原のように背の低い雑草や花しかなく、木々の代わりに木造の小屋が一軒、ぽつんと建っていた。

「ここよ」

と、少女は木製のドアを開けた。少年は導かれるようにして小屋の中に足を踏み入れる。少女が彼の足の汚れに気づいたのは、そのすぐ後だった。

「あ、ちよつと！」

少年は気にも留めず、土色の足跡を残してゆく。少女は彼を追いながら、それを一つ一つ布で拭き取っていた。

少年は小屋に入ってからすぐの広間ではたと足を止めた。長方形のテーブルの長い辺に沿って肘掛椅子が二つずつ並んでいる。奥の方にカウンターで仕切られている台所も見えるが、立ち止まった理由はそのいずれでもない。

においだ。懐かしいにおいがする。もう何日も嗅いでいなかったせいか、嗅いだことがあるという記憶しか残っていない。そのにおいの正体すら曖昧模糊として判断がつかない。においのする方へ顔を向けると、部屋の手前の隅から階段が伸びていた。二階へと続くものだ。近づこうとしたとき、誰かに手首を掴まれた。

振り返ると、少女が顔をしかめていた。もう片方の手にすっかり汚くなった布切れを持っていた。よく見ると、それはついさっきまで彼女の腰に巻かれていた前掛けだった。

「あなたの服を持ってくるから、これでちゃんと足を拭いて」

少年の手にその布を持たせて、彼を椅子に座らせる。そして「こうやって拭いて」と布をもった彼の手を足の裏に持ってきて、ごしごしと擦ってやった。少年はくすぐったかったが、少女の怒りを視線と気配で察し、おとなしく従うことにした。

彼女は先ほど彼が上ろうとした階段の向こうへ消えていった。少年が両足を拭き終える前に、彼女は丁寧に畳まれた服を両手で抱えて戻ってきた。白いワイシャツにこげ茶色の長ズボン、シンプルな無地の下着。奇麗に畳まれたそれらの上に、ズボンと同色の中折れ帽子が乗っかっている。

少女の助けを借りて　ほとんど着せられるようにして　少年はそれらを身にまとっていった。シャツもズボンもサイズが合わず袖が余ったが、帽子だけはやけに窮屈だった。きついので脱ごうとすると、少女が「絶対に駄目」だと言うので我慢せざるを得なかった。

その間もずっと、彼は懐かしいにおいに気を取られていた。

「においが、する」

「え？」

鼻をぴくぴくと動かし、少年は少女の制止を振り切って階段を駆け上がった。二階は短い廊下の壁に、左右一つずつドアがあるだけだった。少年は迷わず向って右のドアを開ける。においはそこからしていると確信していた。

開けた先は寝室のようで、小さな机と大きなベッドが部屋の奥に置かれていた。そのベッドの掛け布団から、老婆の顔が覗いている。ふんわりとした帽子を目深に被っているが、皺くちやの顔は隠しきれていない。小さく開いた口から微かに呼吸の音が聞こえる。老婆は少年が入ってきたことに気づいたのか、重たそうに瞼を開けて、首をドアの方に向けた。

「……………」

少年はベッドの傍まで歩み寄り、老婆の表情を窺った。そのとき追いかけるようにして少女がやって来たのだが、少年は気づかなかった。

「においは、老婆からのものだった。」

「きみは、だれ？」

「……………」

少年の問いに老婆は答えない。瞳は確かに少年を見ているのに、隙間風のような呼吸しかしない。

そんな老婆を見ると、少年は自分の内側にある何かがつづくのを感じた。そっと老婆の頬に手を滑らせ 爪を立てる。

「……たし、は………」

「？」

老婆が何かを呟いたので、咄嗟に少年は手を離した。

「……わ、たしは、あの子が」

「あのこって、だれ？」

「あの子が、生きて、くれていれば……」

「ねえ、あのこって」

言い終える直前に、少女が少年の肩を叩いた。老婆はそれ以上何も言わなかった。

「私、また森に木の実を採ってくるから、下で待ってて」

## 老婆

少女に言いつけられたが、少年は老婆への好奇心を抑え切れなかった。結局少女に対しても、内側にある何かのうずきについて訊けていない。

つい先ほど、少女は新しい前掛けをつけて小屋を出ていった。少年は椅子に腰掛け、目の前に置かれたあの赤い木の実を見つめていた。「食べていいから」と言われたが、今は食欲がなかった。それよりも、もっと別の何かを食べたいと思った。

赤い実を、見下ろす。いざ獲物が手の届く位置にあると、狩りをするときの興奮は得られない。

「……………」

少年は、また独りぼっちになった。平原をさまよっていた時と少し違う気もするが、やはり、この瞬間は孤独だ。群れにいた頃は、ひと時も仲間とはぐれることなんてなかったのだ。

少女はいつ帰ってくるだろうか。じっと待つことに彼は痺れを切らしていた。勢いよく立ち上がると、眩暈が襲ってきたが、なんとか持ちこたえる。持ちこたえて、亡者のように階段をゆつくりと上る。

先ほどと同じ部屋で、同じように、老婆は眠っていた。

少年は足元をふらつかせながら、老婆の眠るベッドに近づいている。

ベッドの前に辿り着くと、ますます眩暈が激しくなった。鼓動が痛いほどに胸を打つ。自分の身に何が起こっているのか、考えることもなく、ゆっくりと老婆に顔を近づけていく。

そして大きく口を開けて、老婆の首筋に歯を立てた。前歯が皮膚に食い込み、突き破り、音を立てずに沈み込んでいく。歯の先から生暖かい感触が伝わった瞬間、心地良い音で沈黙を破り、食い千切

った。血が口の中にも広がる。懐かしいにおいと共に、その肉を味わう。

一口目に長い時間をかけたが、その後は老婆の身体を無我夢中で貪った。久しく忘れていたような、狼としての自分が帰ってくる。老婆を覆う掛け布団を乱暴に剥ぎ取り、投げ捨てる。寝間着姿が露になる。

少年と狼は、独りではなくなっていた。

首から始まった食事は、腹に到達していた。肉の部分だけを食らうていき、内臓は口手で除けたり、口の中に入った場合は掛け布団の上に吐き捨てた。

美味しい。

自分はずっとこうしたかったのだと、少年と狼は理解した。

肉を引き千切る度に、歯が鋭くなってゆく感覚。後ろめたさなど、始めから、無い。

生きるために、こうしてきたではないか。内側の何かから、記憶が沸々と蘇ってくる。血を啜る度に、肉を噛みしめる度に、懐かしいにおいと共に、思い出す。初めて他の動物を食らったときのことを。

ベッドの白いシートが朱に染まる。口元を拭くと、手の甲が真っ赤になった。

それを見ると、少年は微笑んだ。狼は、それを見て鼻息を荒くした。

狼が肉を食い千切り、少年が咀嚼しながら喉に通す。

腹が満たされた頃には、老婆の面影は残すところ顔のみになっていた。ふと手を見やると血みどろになった人間の両手が赤い雫を滴らせていた。乱暴に引き裂かれた身体は、辛うじて老婆の頭と繋がっている

「……………」

すっかり赤くなってしまったベッドからは、やはり、なつかしいにおいがした。



だが、何かが違う気がする。ぐちゃぐちゃになった内臓を見て、少年は違和感を覚えた。

老婆の引き裂かれた体内に、顔を埋めてみた。今度は、歯を立てずに。

奇妙な温かさはあったが、少年は物足りなかった。

聞こえない。何も、聞こえてこない。

そこには静寂しかない。

自分の胸に手を当てる。とくとくと脈を打つ、内側にある何か。

老婆には、それがなかった。既に自分がぐちゃぐちゃに潰してしまつたということなど、知る由もない。

様々な疑問に駆られながら呆然としてしていると、物音が耳に飛び込んできた。

少年は我に返つた。少女が帰ってきたのだろう。聞こえてきた音は紛れもなくドアを開けた音だ。

自分は、とんでもない過ちを犯してしまったのではないか？

少女にこの場を見られたくないと思つた直後、焦りに駆られた。

足音が聞こえる。速い。きつと走っている。

その足音が階段を踏む前に、少年は決断した。

床に投げ捨てた白い掛け布団　表の方は汚れていない　と、

安らかな顔をしたままの、骨と僅かな肉のみで繋がっている老婆の生首。

少年は、隠れた。

## 少女と老婆と少年

木の実を採っているときも、少女は終始落ち着かなかつた。あの少年を一人にするべきではなかつたと、今になって後悔している。採集を早めに切り上げて小屋へ戻ると、ドアを開けた瞬間から異様なにおいが漂ってきた。

少女はすぐさま階段を駆け上り、廊下の壁にある向かつて右側のドアを開け放つ。

そこには、ベッドの上で眠りにについている老婆の姿があつた。だが、異様なにおいを放っているのはこの部屋だ。

老婆の掛け布団に覆われた身体は、不自然に膨らんでいる。小刻みに震えているのは、仲に誰かが入っているからに違いない。

「どうして？」

返事は、来ない。

「どうしてそんなところにいるの？」

布団の中にいる人物にも、聞こえているはずだつた。

「なぜ隠れているの？」

少女はベッドの傍まで駆け寄ると、掛け布団を掴み、床へと投げ捨てた。

「ねえ、答えて」

掛け布団が奪われ、老婆の死体の上にくすぐまる少年の姿が露になる。頭を抱えながら震えていた血塗れの少年は、取り払われた掛け布団を求めて四つん這いで動き始めた。老婆の無惨な姿に少女は目を見開いたが、すぐに逃げようとする彼の前に立ちはだかった。行き場をなくした彼は、上目遣いで、泣きじゃくった顔で、少女を見上げた。怒っていない代わりに、とても悲しい表情をしていた。むしろ泣きたいのは自分の方だとも言いたげで、それなのに強がつて唇を震わせていた。

少年はそんな彼女を見ていられなくなつて俯いた。

「なつかしかった、から」

消え入りそうな声でそう呟くまでに、それほど時間はかからなかった。

「なつかしい、においがしたから。においが……」

「においって、どんなにおい？」

「それは」

少年が思い出そうとすると、すぐにあるものが浮かんだ。考えてみれば、それはひどく身近だった存在だった。

直面した真実は、彼の背筋を這い上がり頭に達した瞬間、冷や汗になって流れていった。言葉の先を続けるどころではない。罪の意識だけが、静かに積み上がっていく。

「でも、え、なんで……」

勝手に狼狽し、怯え始める少年を不審に思った彼女はしゃがみこむと、両手を床についたままの少年と視線を合わせた。

少年は、初めて彼女と出会ったときのことを思い出さずにはいられなかった。

「なんでって？」

「あの、あのにんげんは、おれ、おれの……」

「あなたの　もしかして、お母さん？」

「なっ……」

少年は思わず後ずさりした。少女がさも当然のようにその結論に至ったのが、不思議でならなかった。

明らかに不審な態度を取る少年に、少女もまた異変に気がついた。

「あなた、もしかしてまだ気づいてないの？」

血のにおいが充満する部屋で、少女は被っていた赤い頭巾を脱ぎ捨てた。隠れていた頭頂部の左右から、両耳が飛び出した。ずっと横になっていた耳をいたわるように撫でるのを見て、少年は対に開いた口が塞がらなくなった。

「み、耳」

辛うじて出た声は完全に裏返っていた。少女の切りそろえられた茶色い髪が頭部を覆っている。その頭部から左右斜めに生えている耳　狼の耳が、ぴくぴくと動いていた。様々な疑問が頭の中を渦巻いた。

呆けている隙に、少女は彼の帽子も取り去った。そして、同じように隠れていた彼の耳にそっと触れた。

「わっ!？」

その瞬間、自分の耳もまた、狼のままであったと彼は気がついた。帽子を被ったとき窮屈だった理由がようやくわかった。

「私も、狼なのよ」

少女は大切そうに呟いた。同じ狼としての静かな気配が、彼女に重なっていた。少年は、どうして彼女に惹かれたのか、ようやく理解した。

「それに、あのおばあさんもね」

亡き老婆の帽子も取ると、そこにはやはり、狼の耳が隠れていた。少年の悪寒が、確信に変わる。計り知れない罪の意識に、自分が内側から崩れていくようだった。

「このおばあさんも、あの赤い木の実を食べて人間の姿になったのよ。その時からもう、瀕死の怪我を負っていたけど」

少女は老婆の屍を見つめていた。

「……どうして、にんげんになったの？」

「人間の姿なら、人間に襲われなくて済むでしょ？　時々此処にも本物の人間が来るけど、この姿なら、ばれないから」

寂しげな問いかけに、悲しげな答が返ってきた。

少年の内側にある何か、揺れた。

「……………」

「おばあさんは、あなたと私が出会う少し前に、この小屋に来たの。怪我をしてたから私が手当てをして、木の実を食べさせてからここでずっと寝かせてただけど、その間何度も同じことを言ってた」

少年は、老婆の言葉を思い出した。

「 私は、あの子が生きてくれていたら」

そして、口にした。

少女が頷く。

「そう、それ。あなたも聞いたのね。いつも言ってた。でも、それだけしか言わなかった。多分、どこかの群れの母親だったのかもね。人間のせいで、離れ離れになったんだわ」

「ははおや……」

記憶を遡っていく。平原をさまよっていたときよりも、ずっと過去に。母親の体にもたれて眠っていた、あの頃。その時感じていた温かさ。

つい先ほどまでそれを感じていた。

老婆の引き裂かれた身体に、顔をうずめたとき。

掛け布団を被ってうずくまって、老婆の屍に全身を押し当てていたとき。

いや、老婆に噛み付いたとき。

その直前の眩暈から、本当は、身体が覚えていたのに。

「おかあさん……」

「え？」

少年の泣き声に、少女は振り返った。

ただ、泣きたくて、泣きたくて、彼は彼女の足にしがみついた。

どうしよもなく、誰かの温かさが欲しかった。

## 最終話：狼の赤い寄り道

少年の慟哭は、夜まで続いた。窓から差し込む弱々しい月光は、二人ではなく、老婆の亡骸を照らしていた。

彼は泣きじやくりながら、少女に自分のことを全て話した。最初は群れで暮らしていて、気がついたら独りぼっちになっていて、宛もなくさまよって、森に辿りついて

「それで、きみとであった」

「そうだったのね……」

彼女は慈しむように少年の頭を撫でながら、

「私も、あなたと同じように群れと離れ離れになったのよ」

「……………」

しかし突然、少女は表情を歪めた。

「人間の仕業よ。きっとあなたの群れも襲われたんだわ」

彼女の憎しみに駆られた顔を、彼は初めて目にし、驚愕した。

「私の群れはある日突然人間に襲われた。銃を持った奴らに、父さんも母さんも撃たれた。他の仲間や兄弟とは離れ離れになったまま。此処に辿り着いたのは偶然」

自らの境遇を語るうちに、表情は次第に安らいでいった。だが、少年は彼女の心の裏を垣間見たような気がして、ほんの少しだけ怖かった。彼自身、人間に襲われたことがあるとはいえ、憎んではいなかったからだ。

「この家にも、最初は人間が住んでいた。私は此処で、初めて人間を襲った。仕返ししたの。それが初めての狩りだった。それから、あの木の実を食べたの。そうしたら……」

「にんげんに、なつてたの？」

少女は黙って頷く。

「でも、耳だけは変わらなかった。それに気づいたのは、初めて此処に人間がやってきたときだった。その時も逆に食い殺した。でも、

私が襲った人間は皆銃を持っていなかったわ」

少年も、銃の恐ろしさを知っている。見えない何かが大きな音と共に迫り来る恐怖は、ぶつかってしまったら最期だ。

「あなたのお母さんもここに来た時既に怪我をしてたじゃない。銃で撃たれたに決まってる……」

少女は自分の肩を抱いた。辛い思い出は、銃では届かないところに傷を負わせる。少年は老婆の真実を知った時、それを思い知らされた。

「怖かった。だから、人間のふりをして此処に住もうって決めたの。あの木の実を食べ続けていれば、ずっと人間のままでいられるから」少年の内側にある何かが、激しく脈打つ。彼女を助けてやりたいと、強く思った。

「……おれも、にんげんになりたかったんだ。きみのおかげ」

「やっぱり、人間が怖いから？」

「そうじゃない。そうじゃないよ。おれは、ただ……」

四つん這いのまま、少年は少女へ近寄った。互いの肩に顔を乗せ合い、床についていた手と手を重ねる。少女は戸惑ったが、すぐに少年に身を委ねた。

「ただ、何？」

少女に促されても、少年は言葉を知らない。今まで自分が感じたことのない衝動の、名前がわからなかった。ただ、その後に来るものは知っている。熱いものがある一点に集まっていくこの感覚を、以前も少女に対して得たことがある。

「ただ、きみに、興奮してるから」

「……………」

今もまた、少年の股間からは鋼のように固く張り詰めたものがそり立っていたのであった。

しかし、少女は沈黙したかと思えば、どつと笑い出した。

「あはははは！ それ、つまり私のことが好きっていう意味？」

「すき……そう、好きだ！ きみのことが」

互いに笑い合っではいるものの、少年は素直に、少女は単に面白がっているだけだ。

「それで、人間になりたかったってこと？」

「うん。でも、きみが狼なら、おれはきみといっしょに狼にもどりたい。そして、狼として生きたい」

「 どうして？」

少女の顔が急に強張った。緩んでいた緊張がぴんと張り詰める。

「だって、おれときみは狼だから」

「人間に殺されてもいいの？」

「おれたちは生きのびたじゃないか」

「それでも、いつかきつと殺される！」

少女は立ち上がって激昂した。まるで人間と偽ることを望むかのように。

「私たちの狩りと同じよ。人間がする狩りも、いつかは成功するに決まってる。怯えながら生きるのは、もうたくさんなの！ 人間としているのが安全よ」

「にんげんになったって、きみは怖がってるじゃないか」

「っ でも、あなたのお母さんだって人間になったからここまで生きてこれたのよ。あなたが殺しちゃったけどね！」

怒りに任せた言葉を失言だと気づいたのは、少年が顔を俯けた後だった。

少女はなんととしても、人間として生きてたかった。その方が、誰にも殺されず、生きていけるから。少年よりも幼かった頃に群れから離れた彼女は、狩りを学ぶこともなければ、狩りの必要性すら考えようともしなかった。人間を食い殺したのは、狩りではなくただの捕食だ。そこに技術はなく、人間に対する恨みと肉食獣としての本能しかない。彼女はそんな肉食としての自覚を持つ前に、人間として生き始めてしまっていた。

「……………ごめんなさい」

「いいんだ。ほんとうのことだから」



互いに傷つき合い、二人はしばらくの沈黙とと共に、罪の意識をゆっくりと消化させていった。

月は傾き、ようやく二人を照らし始めた。二人は向かい合って床に座り込んで、互いに互いの言葉を待っていた。

先に口を開いたのは、少年の方だ。

「おかあさんが、言った。あの子が生きてくれていたら、って。

おかあさんはきつと、おれに生きてほしかったんだ。狼として」

「狼として？ そんなこと、一言も言っただけじゃなかったわ」

「わかるんだ」

「どうして？」

「おれのなかに、おかあさんがいるから」

確信しかなかった。少年は一縷として迷いのない目で、少女を見つめた。

「おれは、おれとおかあさんは、狼だ」

そう言うと、突然少年は立ち上がって服を脱ぎ捨て始めた。もはや必要ではないと、むりやり引き千切る。

またしても少年の全裸を見させられたわけだが、不思議と少女は目を背けることができなかった。むしろ、その姿こそが正しいとまで思えた。

「……………」

「おれは、きみといっしょに、狼として生きたい。きみが好きだから。ひとりはもう、いやだから」

「人間が、怖くないの？」

少女は立てなかった。人間のことを考えるだけで、足が竦む。銃声を思い出すだけで、自分の心を撃ち抜かれたと錯覚する。

少年は彼女に視線を合わせた。四つん這いで、それこそが本来の姿であるかのように。

「こわい、かもしれない。でも、おれたちは狼だから」

その瞬間、少年の身体は、あっという間に狼へと戻っていった。しかし、少女が初めて目にしたときよりも、ずっと澄んだ目になっ

ていた。

狼が吠える。

それが何を意味するのか、少女にはわかった。彼女はそれ以上何も言わずに、服を脱ぎ始めた。だが、途中で面倒になり少年と同じように引き裂き、破り捨てた。

狼として生きる覚悟を決めたとき、彼女もまた、人間から狼へと姿を変えた。他の動物を食らい、人間に襲われる存在となったことに、悲観する要素など一つもなかった。

そこに、二匹の耳に一階のドアを叩く音が聞こえてきた。

「おい！ 森で迷っちゃったんだ！ 一日でいいから泊めてくれ！」  
乱暴なノックと共に、人間の声も聞こえてくる。

少年と少女　二匹の狼は、言葉も交わさずに頷き合った。

その夜、森の中に二匹の狼の遠吠えが木霊した。

翌日、太陽は小屋の前に倒れている狩人の死体を照らした。

二匹の狼は、長い長い寄り道を終えて、広大な平原へと帰っていった。

## 最終話：狼の赤い寄り道（後書き）

これにて無事完結です。短い作品で、しかも以前書いたものの手直しですが、予想以上に修正に時間がかかってしまいました；

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました。欲を言えば、何か感想などをいただけるととても嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8530z/>

---

狼の赤い寄り道

2012年1月4日02時48分発行